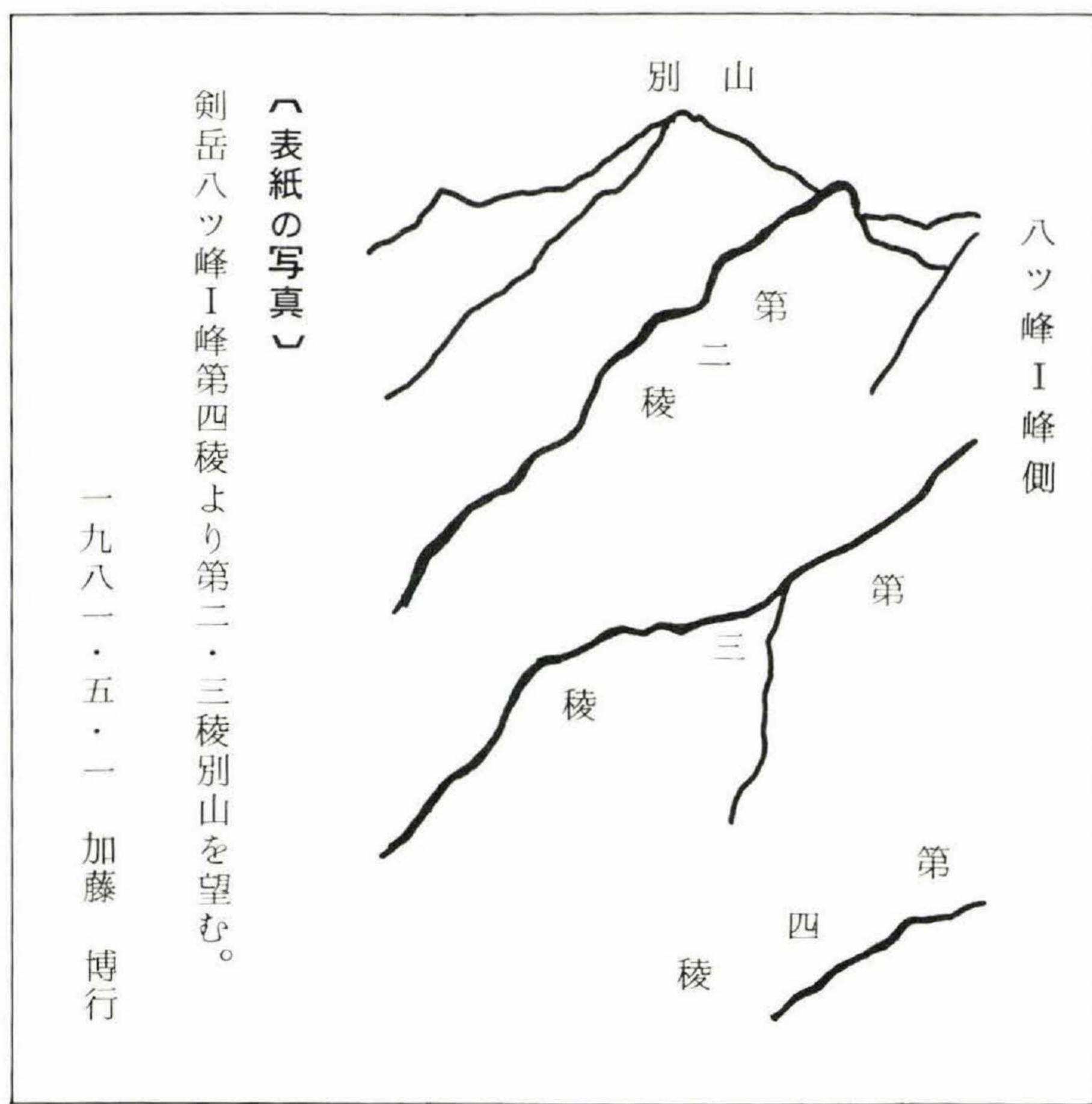


針葉樹會報

復刊第59号



1981. 6



八表紙の写真

剣岳八ツ峰 I 峰第四稜より第二・三稜別山を望む。

一九八一・五・一 加藤 博行

発行日 1981年6月23日	針葉樹会報 復刊第59号	編集人 〒146 東京都大田区東矢口 3-21-6 富士荘 加藤博行 TEL 03-739-2954
-------------------	-----------------	--

五月の大町で

—明星山南壁と高浪池—

柿原謙一

ゴールデンウイークがくると、わたしは大町に別墅をもつ山田さんを訪ねる。ここを基地にして八方尾根・爺ヶ岳・針ノ木峰や立山などに、日帰り登山をするのが、ここ数年の慣例となってしまった。

例年快晴にもめぐまれて、胸のすくような山行をはた

すことができたが、これ同氏の厚意による事大である。その山行のなかでも、明星山南壁の展望と高浪池迷路行の一日前は、低地ながらも妙に印象が深い。

数年前のこと、あずき4号で八王子をたち、松本で金沢急行白馬に接続、信濃大町で下車して友の家に着いたのは午後三時すぎだった。明日は明星山南壁をみてから、高浪池にまわらんか、と彼は言う。それはどこにあるのだときくと、五万分図幅「小滝」にたしかに高浪池がある。

翌朝はゆっくり大町をたつ。大糸線から眺める快晴の白馬三山の春姿。南小谷駅で乗りかえて、小滝駅につくと午后一時にちかかった。下車して姫川の流れにわかれ、指導標に出あつた。これでよさそうだねと、そのまま登支流の小滝川右岸を辿る。瀬野田部落をすぎてしばらく

ゆくと、対岸に明星山南壁があらわれてくる。ヒスイ峡標示の立つ道ばたに腰をおろして、大岩壁を仰ぐ。小滝川の川底からこの大岩壁はそそりたつていた。川原からすぐにはじまる岩登りは、わが国でも数少ないとどういうのが、わたしの第一印象だった。

青年時代から岩登りに精をだした彼は、直立するこの明星山南壁に見入つて、あくこともなさそうであつた。シーズンともなれば、ここをおとずれるクライマーは多いと言う。しかしわたしには、このあたりがわが国でも有数のヒスイの産地である由のほうが、興味をさせた。この山峡で採石された翡翠が、佳人の指をかざつたであろう。カワセミなどをふくめたひすい科の鳥の総称がヒスイであり、その羽のような色の宝石が翡翠とよばれるのだそうだ。

少憩して二時頃になる。南からそいでいる細流の谷にふみこむと、細い山道があり、やがて高浪ノ池分岐の指導標に出あつた。これでよさそうだねと、そのまま登りだす。

ところがいけません。やがて植林帯に入る
と、北面のせいで残雪があらわれ、登るほど
に深くなり、見とおしのきかない杉木立のな
かでは、道さがしのすべもない。林業者のく
る季節ではないので、壺足のあともない。残
雪をふんで南へと登つてゆくほかなかつたが、
どうもすこしばかり東よりに南行していたの
である。

ともかく枝が邪魔する植林帯は抜けだした
が、当然のことながら藪山にてた。やがて赤
禿山から△六〇六Mへとつづくなだらかな稜
線が見えてきたあたりで、道にあつた。こ
れにしたがつて登りきると、小さい峠に立つ
た。東に小部落がみえ、東南側の山村にはな
ごやかな春の光があふれていた。

地図とくらべてみると、高浪池から一糸ほ
ど北東よりのコルに来たこととなつた。すで
に三時をすぎている。「もう高浪池はあきら
めましょう」と腰をおろしてしまつた。
この名もしらぬ小さな峠は、東南面の眺望
にすぐれている峠であつた。姫川をへだてて
雨飾山が聳えている。美しい春雪の山波をわ

けて、フトンビシの岩壁が黒い。頸城山塊で
は焼山と天狗原山方面がまだ真白であつたが、市・栃木県などからも訪れている。これらの
雨飾山西側の展望をほしいまま楽しんで、わ
たしの満足もいいとこだつた。山田さんもこ
の眺望には満足した様子である。

東にくだつて野口部落をとおり、四時すぎ
て小瀧駅に着く。発車までに一時間半待たね
ばならない。駅附近を歩いてみたが、パイ
をやる食堂も居酒屋も見当らないので、駅の
待合室にもどり持参してきたウイスキーの水
割りで乾杯する。

時間ががあるので話は尽きない。明星山の南
壁は豪快に展望できたが、高浪池は迷路行に
終つたねと苦笑した。野口部落にくだるとき、
高浪池に向つている車道が目についた。シーザー
ズンとなるとマイカーも登るし、池をかこん
とだろう。観光道のつけられた池のほとりへ
ゆくよりも、迷つてあのコルへでて、思はざ
めました。駅前に食堂があるので、早速パイ
食をとりにこられ、にこやかに、梅池側から
乗鞍岳をこして蓮華温泉へ降る春スキーの醍
醐味を話してくれた。毎年実行されている由
である。よほど山好きの方とみうけた。

上出来だよという結論になつた。

待合室にかけてある登山者名簿をめくつて

みた。あの大岩壁登攀のため、大分県・西宮
市・栃木県などからも訪れている。これらの
人々は小瀧川の川原から、すぐにクライミ
ングをはじめしたことだろうと、わたしはあら
ためて今日のそいた川底を思いおこした。

お神酒がまわつたところで南小谷駅へ発つ。
そこでも二十五分まつて大町へ発車。小瀧一

大町着までに要した時間は、小滝での待つ間

をふくめると四時間である。かねてから不便とは聞いていたが、別に立腹しなかつた。環状線の混雑とくらべることが、土台まちがつている。村落協同体の実相にふれえたことでむしろ満足だつた。それにしても、ずいぶんと時間がかかつた。

その夜おそくなつてから、結婚后一ヶ月こそこのわたしの長男夫妻が到着した。翌朝には、名古屋の山友が義妹をつれて到着し、にぎやかになつた。みんなして八方尾根の春スキーを楽しむことに一決した。

今朝も快晴である。マイカー二台で細野へむかい、第Ⅱケレンで昼食。八方池の第Ⅲケルンまでスキーをかつぎあげる。右には白馬三山から不帰嶺の春姿、左には五竜・鹿島槍の連嶺がならぶ。快晴無風のゴールデンウイークでも、ここまで登つてくると人影はすぐない。昨年ここでできた拙句に
「ねころびて眺むる雪や春スキー」があつたが、今度は「いづくよりあがる雲雀か春スキー」ができた。ひばりの囁く声を耳

にしたのである。

兎平駅までスキー滑降するときがきた。不帰嶺を背にして安曇野めざす滑走には、若い人たちの脚力が物を言う。年輩のわたしは、ビリで適当にすべり降つた。

夕刻の兎平駅はおそらく混雑していた。待つよりもスキーかついで歩くにしかずと、雪は消え枯草のでている急坂を、細野へくだる。路のとうが頭をだしていた。

その夜の大町では、若くして鹿島槍下山の折に遭難した中村慎一郎さんの御両親と弟さんにお目にかかつた。今日が命日なので例年どおり、鹿島部落の北は大川沢右岸に建つ追悼碑を訪れ、回向されたのであつた。遭難の時にこのエコノミスト村が、対策基地だつたし、故人は一橋山岳部の後輩だつた。「慎ちゃんが、慎ちゃんが！」と想い出を語る母葉がない。

翌日は雨のあと曇天となり、強い風が吹くなかを、中村さん御一家は国許へ発たれた。

その翌日、風は強いが快晴である。一同でスキーをもつて籠川谷にゆくという。わたしはスキーはもたずに同行した。

扇沢駐車場に車をおいて、大沢小屋前をよぎり、針ノ木峠と針ノ木岳直登コース分岐点にスキーをデポする。風が強くて物凄く寒い。あたたかいコーヒーの味をめで、爺ヶ岳の姿を眺める。さらにマヤクボ直下の草つきまで登つたが、雪質の変化がはげしい。滑落しては自慢にもならぬと、針ノ木岳直登を断念して、スキーを置いた地点へ戻つて昼食をとる。いよいよスキー滑降のときとなる。ここまでかつぎあげた連中は、さすがにスキー巧者である。わたしはアイゼンとピッケルのままで歩いて降る。もう落ちるべき雪塊はおおむね落ちてしまつたという。大きなデブリがごろごろしている。

大町に戻ると三時すぎとなつた。名古屋のお目にかかつたが、わたしには慰めるべき言葉がない。

堂。黙然として動ぜざる父君。昨年もここで大町に戻ると三時すぎとなつた。名古屋の友はそのまま車で帰宅の途につかれた。わたしは硫黄の香り漂う浴槽につかって汗を流し、昭和五十二年春の大町行もこれで終点だといふ想いにふけつたのである。

小谷部、森川両君の手紙（一）

望月達夫

年に二回ぐらいの針葉樹会々合ではあきたらないと、久保孝一郎君の肝煎りで、二木会なるものが毎月第二木曜に開かれるようになつた。その第二回目にある五月十四日の二木会で、今年の十一月二十八、九日に小谷部全助君の追悼山行を、どこか白峰北岳のよく見える処ででもやりたい、という提案が出され、皆さん異議なく賛成したが、彼と同期の私としては、それならどうしても一肌ぬがなくては：と深く肝に銘じた。と同時に、その際、同年代の森川真三郎君や鷹野雄一君の追悼もあわせてやりたいと私は附言しておいた。

ところで、その時私の胸に浮かんだことは、長いこと私の手許にあって、一度は淨書したこともある小谷部の手紙である。若し発表するなら本会報が最適だろうが、果して今の若い会員諸兄に興味をもつて貰えるだろうか、という気もおきてそのままにしてあつた。が、と、「山日記」二冊が、いま私の手許に保管

私でも居なくなれば、不明の儘埋もれてしまふことも考えれば、活字にしておくのも無意味ではなかろうと思つて、ここに一括かかげることにした。昭和八年から十六年の間の二十五通だが、最初の一通は「小谷部のハガキから」として本会報復刊十四号（一九六六年八月刊）に出したことがある。

また森川君の手紙については本会報復刊九号（一九六四年十二月刊）に載せたことがありますが、偶々もう一通私の手許で見出したので、これを附記しておこう。

・佐谷健吉「我が心の師 小谷部全助―日本登山思潮史ノート」（「岳人」二十三号、一九五〇年三月刊）

・吉田二郎「小谷部全助ノート」(1) (4)（「山と渓谷」二三九・二四二号、一九五九年四月・七月刊）

○昭和八年七月二十二日消印 品川区大井元芝八四九より（甲斐駒のエハガキ）

小谷部が生前愛用した山内のピッケル一本 暑中御見舞申上候

待望の山生活は実に愉快だつたでせう。僕

も十二日夜行で南アルプスへ這入り、駒・仙丈・白峯・鳳凰の諸山を探勝致しました。風雨に降り込められたり等して、帰京したのは二十日の夜でした。大樺沢の雪渓へ迷ひ込んだりして相当苦しい体験も嘗めました。

では又、左様なら

○昭和十年七月三十一日付 品川区大井元芝

町八四九より（ハガキ）

先日は失敬、常念の方は如何でした、嘸暑かった事と思います。あれから小林、森川、鷺崎、佐々木、小柳は六人用を持って涸沢生活へ行き、又僕と斎藤正治とは錫杖から槍平の方へ出掛け、共に快晴に恵まれてしみじみと山の好さを堪能する事が出来ました。去る廿九日思出多い上高地を後に一同天幕をたたんで帰京、天幕は改良、修繕の為一応東京へ持帰りました。では奥さんによろしく、さようなら

○昭和十年九月八日付 西宮市外甲東村神呪洲崎方より（封書）

拝啓 氣候不順貴兄には如何御暮しと案じ

居ります、小生無事同封の記録の如く長い山生活を了へ、唯今関西に羽を休め居ります故御安心下さい、今回のカクネ生活は天候に恵まれませんでしたが、張切つて愉快な登攀を味ふ事が出来ました、委細鷹野達から御聞きの事と存じますが、何れ近く拝眉の節に譲ります、こちらには参考に致したき文献も無之、原稿は遅々としてはかどりませんが、大体骨筋位はまとめて置きます、カクネや大川沢の地図等今回の紀行でほぼ完成致しました、帰京の節は及ばず乍ら御手伝も致す積り、それ迄御苦労乍らよろしく御願申上げます、今度は大学も論文事件で休講等多かれと祈つて居ります（？）

天候安定致きば又帰京の途路、双六谷から千丈沢、高瀬下り等致したく思つて居ります、十五日前後には帰京致します、では皆によろしく、末筆乍ら貴君一家の御精采を祈る。

○昭和十一年三月二日付 品川区大井元芝町八四九より（ハガキ）

天候安定致きば又帰京の途路、双六谷から千丈沢、高瀬下り等致したく思つて居ります、専らバットレスを目指して準備して居りましたが、肝甚なハーベンが求められず（好日山莊当分営業中止）止むなく中止です、でも過ぐる冬の激しい想出を紫煙をくゆらし乍ら追想するのも悪くないと思いまして、唯スキーコースのカクネ里生活をいう。論文事件は杉村の向く儘に南の三月を味ひに行きます。予科

広蔵教授の事件かと思う。『針葉樹』八号編集最中の手紙である。洲崎氏は彼の義兄。

昭和11年11月富士山での小谷部君（望月）



生は野沢へは九日午後一〇・五五上野発列車の最前部車輌に陣取る筈で大勢参ります。僕はいくらか遅れるかも知れませんから、成可く一緒に行つて、最初からビシビシ指導してやつて下さいませんか、尚合宿責任者は佐々木、事務会計は原が担当するさうです、では取急いでおりますから失敬します、いづれ合宿で、

○昭和十一年三月二十四日付 西宮市外甲東

村神呪、洲崎方より（封書）

前略 合宿よりお便りもせず本当に失礼しました、もう森脇あたりから御承知と思ひますが君のお便りは解散後木曾御嶽で彼から手に入りましたのです。

去年の三月もくさつたが、今年の三月程一橋山岳部の否商大氣質の軟弱さ、不信な行為等にくさつた事はありませんでした、それこそ浦松さんの口ぶりではありませんが、登山と言ふ一つの芸に這入る以上、今少しの熱意と覚悟が必要ではないかと思ふのです、突然かう言はれては君も一寸見当がつかぬ事と思ひます、が兎も角、薄弱児童の寄り集りみた

いな現状を、少しでも打破向上させなければならぬ事は、僕達の最も力を強く入れねばならぬ仕事の一つだと思ふのです、僕が殊更今度感じた委細はいづれ面談致します。

扱予定の如く三月の三日一人で新宿を発ち

ました、ザイルやハーケン等一切持つて来な

いとは云へ、例の重いスキーや防寒具等で意

外に思ふ程の荷です、四日一人なのでハイヤーも傭へず、三時間も空バスで眠つたり馬鹿らしい位時間を無駄にした上、有野でほうり出されてトボトボと長い旅の一步を踏み出し

ました、それから一週間にわたるスキーの旅

をして信州へ抜けたのですが、あんなに印象

深い山旅をしたのは始めてでした、雪深い夜

叉神峠、野呂川沿ひの雪景色、なつかしい白

根御池の小舎へ食料補給にもぐり込んだ事、

大樺沢の素的な滑降、辛い零下十数度の朝徒

渉を繰返した事、腰迄ぬらして岩蔭でビバークさせられたり、雪橋を踏破つて危く深淵墜

落を片手で免れた事、高廻りの辛さ等々、そ

れから仙丈岳頂上からの眺望も忘れられませ

ん、北沢峠から伊那へ出る途は、始めて心

配して居たのですが、カンの一手で原始林

を抜け出す事が出来ました、一人の南アルプスの旅こそ本当に山男のよき試練であり、又

十分なる満足を与へてくれるものです。

それから野沢へ廻り更に立山へ行く積りで、

したが、パートナーの一方的約束破棄（？）

からすっかり手違ひを生じて、すっかりくさり、佐々木と二人木曾御嶽へ行きました処、

佐々木一人で遊びに出したのが悪かつたのですが、九合目附近でスリップして片目の上マ

ブタを切り、相当ひどい傷を負つて了ひました、直ちに下山させ、ソリとハイヤーで木曾福島へ出し、仮手当を加えて帰京させました

が、その為又々予定を狂はせ、翌日六合目へ引返して荷をまとめ、頂上も踏まずくさつて

大阪に来た次第です。若し出来ましたら、一寸佐々木の処へ見舞に行つて下されたら、彼も喜ぶ事と存じます、彼も当分山へは行けなくなるだろうと思ひます。

この事件で考へたのですが、結局アイゼンテクニックの練習不足に原因すると言ふ事が出来る以上、今少し僕達の合宿のやり方を変

えなくてはならない事になります、当人の練習如何によるとは言ふものの、昔と違つて冬山が常識となつた今日の大学山岳部で、あんな温泉スキー合宿は全然意味ないものなのです、最初からスキー、ワカン、アイゼン等々平行して練習すべきであると言ふ風に僕の考も變りました、従つて合宿を現在の様な冬山を知らぬ予科生に委すのも、大きな間違だったのでした、この点考へて次年度からは断然改革したいと思つて居りますが如何でせう、

いづれ集つてよく相談したいと思ひます、苦しい修行や辛い努力からの逃避たる所謂静観派は、断然現今の山岳部には有害なるものである事に気付きました。さう云ふ思想が恥ずべき遭難を起す事は、僕達身近かに見て来て居りますから。

即ちその為には大学山岳部の特殊な地位を

明らかにして、具体的にも進歩の方向をはつきりさせる様にしむける事です。矢張り強制も或程度必要となるのは止むを得ぬ勢でせうし、それが為所謂氣分を害ふと言ふのは、どこかに引け目を感じて居る逃避者の心配なの

ではないでせうか、そしてそれで氣分を害ふ様な者も結局逃避者であり、部員としての自覚の薄いものなのではないかと思ふのです、馬場さんではないが、急に四月から改革強制と騒ぎ出す事は、どうかと思ひますから、い

既に一昔前の存在です、今時あんな状態では

大学山岳部の存在価値零でせう。くさつて居るに委せて、とりとめもない事を書なぐりま

したが、何れ冷静によく話し合ひませう、で

海等すべて水平線の交錯で、この残暑でつく

づく山恋しの情に駆られて居ます、扱小生の

靴ずれ未だなほらぬ為、今回はあまり無理は

出来ませんが、左の様に御池小舎入りする積

りです。九月一日夜大阪発、二日伊那大島一

鹿塩湯泊、三日鹿塩湯一三伏峠小舎、四日三

伏峠一白根御池小舎、尚御池小舎滞在及其後

の小生の食糧（米を除く一切）は、貴兄の方

で御持参願ます、では元気でお目に掛りませ

う。

○昭和十一年三月三十日付 西宮市外甲東村

神呪、洲崎方より（ハガキ）

針葉樹会報有難う、こちらはまるで東京と

違つた関西風ですから、かう云ふものが堪ら

なく嬉しく思はれます、湯田坂は氣の毒でし

たね、君にも色々面倒臭い事ばかりおんぶさ

せて済みません、實際佐々木の事件もあつた

ので、東京へ直接帰る積りでしたが、金の都

ではないでせうか、そしてそれで氣分を害ふ様な者も結局逃避者であり、部員としての自覚の薄いものなのではないかと思ふのです、馬場さんではありません、四月の中旬前には帰京する積りです、では一寸御礼迄

○昭和十一年八月三十日付 西宮市外甲東村

神呪松籟莊、洲崎方より（ハガキ）

先般は勿卒の際とて失礼致しました、都会、

海等すべて水平線の交錯で、この残暑でつく

づく山恋しの情に駆られて居ます、扱小生の

靴ずれ未だなほらぬ為、今回はあまり無理は

出来ませんが、左の様に御池小舎入りする積

りです。九月一日夜大阪発、二日伊那大島一

鹿塩湯泊、三日鹿塩湯一三伏峠小舎、四日三

伏峠一白根御池小舎、尚御池小舎滞在及其後

の小生の食糧（米を除く一切）は、貴兄の方

で御持参願ます、では元気でお目に掛りませ

う。

○昭和十一年十月三十一日付 品川区大井元

芝町八四九から（ハガキ）

前略 今夜から森川と二人で三峠へ行く、

主としてハーケン技術の実地研究と練習をみ

つしりやつて来ます、若し富士がよかつたら、

ついでに登つて来るから帰京は三日か四日に
なる予定、二日の集会に一年坊主が来たら冬
の話でもやつて下さい、尚今日片桐へ寄り冬
山天幕を頼みました、優に五人収容し得る総
二重張流線型の堂々たる奴です、充分御信頼
下さいと言ふ奴です、一寸お知せ迄。

○昭和十二年六月二日付 西宮市外甲東村松

籠荘、洲崎方より (ハガキ)

合氏は唯今京都に居るさうですから、至急貴
兄から芦屋の宅へでも出して下さい、小生帰
京八日夜頃、天幕注文頼む。
(註)『針葉樹』第九号編集中のもの。

○昭和十二年六月七日消印 西宮市外甲東村
松籠荘、洲崎方より (封書)

前略 六月四日付御書面拝見、この際全く

御便り有難う、新緑の南アルプス嘸よかつ

たでせう、大塚、日江井も段々軌道に乗つて
來た様ですね、小生大阪へでも來たら落付い
て書けると思ったのですが、何しろ天下に冠
たる灘の生一本と來ては、気が散つて困ります
す、だが「北岳バットレス」は殆んど出来上
りました、地図を作り地名の統一等をして、
完成するはどうしても十日頃になりませう、くして他の二、三印刷屋へ当つて、単価によ
り貴兄や森脇にも一寸筆を入れて貰はねばなら
ぬ所がありますし。結局皆小生の怠慢の為で
すから、夏は私だけ少し東京に残つて針葉樹
の残務を始末し、出来次第剣の合宿へ馳せ参
じようと覚悟して居ります、當方の広告四件
程あたりましたが、縁故なしでは全然望み薄

です、でも出来るだけ廻つて見ませう、尚十
行部数は既知ですし、大抵一〇〇頁から二〇
〇頁と言ふ見当はつくのですから、その程度
に於て組代、紙代、写真、地図等個別の単価
を精密に出させれば好いのですから、右の如
ます、尚見積りは原稿全部揃はなくとも、發
行部数は既知ですし、大抵一〇〇頁から二〇
十八日以後毎日降雪で、先発隊は徳沢迄順調
に入りましたが、翌二十日無理して降雪中、
奥又白ルンゼを荷上に登つた他、全員可なり
前略 その後御祖父様如何、貴兄の不参加
最終年度でもあり一同落膽しました、天候は
十八日以後毎日降雪で、先発隊は徳沢迄順調
に入りましたが、翌二十日無理して降雪中、
存じの方へ頼むなり、他へ頼むなりした方が
最善と存じます、尤も他の印刷屋へは後で交
渉して見て比較し、若しコストに於て不当な
れば価引させる位の事を、印刷当事者に示し
取れ(以下便箋二枚目消失)
(註)『針葉樹』第九号編集印刷の頃のもの。

送りしました。御加筆願ふ所は鉛筆で記して
あります、広告は五件程交渉しましたが、留
守中か、縁故関係以外お断りかで、全然関西
は駄目です、大阪弁の商人には刃が立ちませ
ん、たゞしどんちゃんからの世話で高島屋は
置く程度で結構でせう。記録は早速別便で御
り、小生のみ日江井を松本迄送り仮手当をし

て帰京させました、小生は鷹野を呼んだりして松本泊、翌二十三日一気に徳沢へ上る積り。合宿は大体徳沢を主として、残留班のみ天幕生活して壁をやる積りです、何れ又出来たら

ツーケスピツエト

セントゴツタルド峠越え

ニ ュ ー ヨ ー ク 森 脇 芳 之

芳之

詳細御便りします、では又、

三丁目十九 洲崎方より（ハガキ）

○昭和十三年四月二日付 大阪市東区備後町
三丁目十九 洲崎方より（ハガキ）
先日は態々御見送り有難う、漸く新住所に

く積りですが、傷の程度等詳しくお知らせ願
い度いと存じます、一生生れもつかぬ不具に
でもなつたら、吾々としても及ばず乍ら何と
か慰安の方法を講じなければならぬと思ふの
ですが、山ならぬビル務めのこれからは、お
互に体丈は丈夫にしてゆかう。

(以下次号に続く)

小屋に着いたのは昼。標高二九六三米と大書いてある。小屋の上の展望台はカチカチの氷にて下手すると足を取られそう。展望台のすぐ横が多少高く歩いてすぐ行ける之れが三角点。稜線の南側はオーストリーの白い峯が見

期オリンピックの在った地一生の内行けるとは思つて居なく車中より見るババリヤ風の住宅の窓外の赤い花棚が印象的。西独は何処も清潔で気持良し。

◎セントゴツタルド峠。昭和五十五年八月九

ツーグスピツエとセントゴツタルド峠越え渡す限り続いて居る夢に見たティロールである。感無量。北側は黒い緑が一面に広がり湖水が幾つか光って居る。空は曇りと成りシユワルツワルドを重々しく見せて呉れる。頂上小ど乗物に乗つて行つたのであり針葉樹会員と書くと、何かの様であるが実は双方共殆んどしては面白次第も無い。

◎西独の最高峯のツーグス・ピツエへ行つたのは一昨年昭和五十四年十月二十一日。朝八時三十分ババリアのミュンヘン主駅より出発ガルミツシュ・パルテンキルヘン迄電車。好天肌寒し駅より見る前山は尖つて岩。其処より登山電車碓氷峠のアブト式でコトコト良く走る。大岩壁が段々身近と成る。車中客は皆登山姿。右側眼下に湖水が緑に輝く。大岩壁直下より屋の売店でバツヂを求めブラットウーストで腹を収め帰途に就く。ザイルバーンの右の岩壁の急斜面を独乙の若人が点々と頂上向けて登つて居る。時々突風が下から吹上げると見えて立上つて居るのも居る。登山電車駅迄見えて立上つて居るのも居る。登山電車駅迄見る。スキー・ヤーが冬の走りを楽しんで居るのが見える。ミュンヘン帰着は六時半薄暗し。ガル

ザイルバーン—ケイブルカー」に又乗替え終着
ミツシユバルテンキルヘン其れは学生時代冬
小屋に着いたのは昼。標高二九六三米と大書
期オリンピックの在った地一生の内行けると
してある。小屋の上の展望台はカチカチの氷
は思つて居なく車中より見るバリヤ風の住
にて下手すると足を取られそう。展望台のす
宅の窓外の赤い花棚が印象的。西独は何処も
ぐ横が多少高く歩いてすぐ行ける之れが三角
清潔で気持良し。

◎セントゴツタルド峠。昭和五十五年八月九
点。稜線の南側はオーストリ一の白い峯が見

日ベントのミニバスにニューヨークの日本人二十人スキスチューリツヒ駅前を出発、途中朝ルツチエルンにて一時間小休アンデルマツトより山道に入る。工事中にて数ヶ月後にはトンネルが開通樂にイタリ一へ行ける様に成るとの事。峠越えの機会は五十五年より減少する。自動車道は急登し乍らウネクネと続く。ヨーロッパの殆んど凡ゆる小型車が通つて居るし又良く急坂の道を登る。日本車は見掛けない。谷は段々迫り両側が素晴らしい大岩壁天氣良し灰色に輝く進むと右手の岩壁に大飛瀑やはりスキスである。現在の自動車路を時々交叉して狭い石畳の道が登つて居る。尋ねると昔のローマ軍団がフランク「現在の独乙」ゴール「現仏蘭西」へ進軍した軍用道路であり又ナポレオンの軍隊がイタリ一へ攻めて行つた道との事。峠の頂上は平な岩で小広く処々登つた自動車が止つて息を入れて居る。両側の山は二四三一米二一〇八米と案外低い。すると峠は一八〇〇米位の標高と思われる。でも前日の八月八日峠はバスの運ちゃんに依れば吹雪だつた由従而岩々の間に残雪が残り休息



の人々は日当の良い處に点在するお花畠を楽しんで居る。峠の一寸手前の山宿で昼食した処ナポレオン軍の某大将が一泊した名所と食堂の前にブラークがはめ込まれて居た。峠よりルガノへ少し降りた処に展望台があり我々一行も小休。肌がピリリと寒い。熊の旗と赤青の三つの旗が風でパタパタ音立てゝ居る処から南を見ると之から行く我々の自動車道は曲りに曲つて続いて居る。実際に降りて見ると下の村迄一時間半掛つた。其夜はルガノの宿で気持良く熟睡。山氣爽やかなルガノ湖は晩夏にて古い映画の「乙女の湖」の如く何とかく静かで裏淋しく波一つ立つて居なかつた。湖畔の宿もべめて居るものが多かつた。

◇ ◇ ◇ 目 次 ◇ ◇ ◇

五月の大町で.....

柿原謙一

小谷部、森川両君の手紙(一).....
望月達夫

ツーグスピツエと

セントゴツタルド峠越え.....
森脇芳之

二木会活動報告・会員消息
編集後記.....
11

春の戸隠連峰.....
12

八ツ峰I峰四稜.....
15

加藤博行

インドヒマラヤ登山計画.....
21

一橋大学一橋山岳部

二木会活動報告

前号にて久保孝一郎さんより提唱のあります

した二木会（毎月第二木曜日に月例集会を開催）は、順調に始動している模様です。世話役の久保さんより、編集子宛活動通知を二度戴きましたので概要を紹介いたします。

一、月例集会

第一回 四月九日 出席者 中島（孚）

佐々木・宮城・久保・高野・望月（敏）

佐薙（於、モナリザ）

第二回 五月十四日 出席者 吉沢（松）

増山・望月（達）・宮城・久保・高野・

望月（敏）・小泉・上原（於、モナリ

ザ）

二、月例山行（予定）

第一回 五月三十日 丹沢山行

第二回 六月十二日 会津熱塩温泉

（日本山岳会の行事に参加）

七月山行 七月四日 奥多摩（故大

田可夫先生追悼）

八月 夏休み 九月 未定

十月山行 針葉樹会の懇親山行に期待
十一月山行 十一月二八・二九日 行
先未定

（故 鷹野雄一・小谷部全助・森川真
三郎 三氏の追悼山行）

このペースで活動が進むと、本家の針葉樹会そのものを脅かす存在になりそうで、本会運営に携わる役員もうかうかしてはおられないと想われます。（編集子）

◇会員消息 ◇

針葉樹会新会員紹介

中西茂（経卒・日商岩井東京財務部勤務）

二年の春合宿で南ア悪沢岳下降中滑落し、左足膝上より切断。（会報復刊五

十二号にて報告）この大怪我にも目げず今年五年目で卒業。そのファイトで今後の活躍が期待されます。

小林修（社卒・三菱商事鉄鋼第二部勤務）同期が一人も残らずリーダーとして苦労したと思われますが、現在四年生の層が厚いのは彼の若手育成の成果でしょう。

（文責・編集子）

赴報

岡田謙三（昭十卒）

五月二十五日、脳血栓のため逝去されました。謹んで御冥福をお祈りします。針葉樹会を代表して中島孚、望月達夫両会員が葬儀・告別式に列席致しました。故人の追悼文は次号にて掲載の予定です。

編集後記

会報五十九号をお届けします。予定通り総会の開催日に間に合いほっとしていますが、印刷費の支払いの方は追いつかず胃の痛い思いがしています。体裁等思いい切って簡素化すべき時期に来ているのかかもしれません。

次号は六十号。ひとつ区切りにする為、（一）針葉樹会報復刊六十号に寄せて、及び（二）国立の部室の想い出、の二つのテーマにつき原稿を募りたいと思います。発行は十月の予定です。奮って投稿ください。（加藤博行）

春の戸隠連峰

— P I 尾根より西岳へ —

加藤博行

今年の正月山行は、鋸岳を末端からトレーニングで足に終ってしまった。以後二月の終りまで山にはほとんど足が向かなかつた。例年のことだが、年末年始でちょっと無理して休暇を繰上げた反動もあるし、一・二月こそ本当に厳冬期で余程強い登高意欲を持たないと、そこの山には登れない。それでも三月の声を聞いて春一番が吹き、或いは桜の開花便りが報じられる頃になつてくると落ち着かなくなつてくる。雪融けの季節は、かけ足でやつてきて都会に暖かい日が続く様になると、もうあせりばかりが先に立つ。毎日強烈な日射しに照らされて雪がどんどん融けていくのを都会においてじつとやり過ごす訳にいかない気持ちになる。こうなるともう日中の忙しい最中でも、山岳部の仲間に電話して、「どこか行こ」と満足に終えた学生も戸隠へ行くという。

うよ。このままでは身体が鈍^生つて変になりそうだ。」或いは、「今週はトレーニングで：：：で足慣らしをして三月末には休暇をくつつけて：：：をしつかり歩こうよ。」等々。悲鳴とも思える電話交信が盛んになり、そして夜の酒場でルートとメンバーの調整に入る様になる。

四月三日、上楠川橋発（六・二〇）P I 尾根取付（十二・三〇）一五八〇メートル地点（十二・三〇）

生の中にOB一人で入つて登るのは初めてだが、雪山の強迫にも似た誘惑を断ち難く、遂に現役最強の三年生三人（土方・萬濃・宮下の三君）と上野発の夜行列車に同乗することになつてしまつた。

未明の長野駅に降りたち、朝食後タクシードベードラインを跳ばす。朝焼けの飯綱山を右に送り、やがて正面に後立山連峰が、ひんやりした朝の空気を一層張りつめる様にしてもなく戸隠へ行こうという話になつてきた。当初は若手OBの常連メンバーで三・四人のパーティにまとまりかけたが、一人二人と櫛の歯が抜ける様に欠けていく。学生同志なら恨みも言おうが、社会人の間では、仕事でどうしても、となればお互い、それ以上は触れ合はれない。そういうして、とうとう一人ぼっちになつてしまつたがここまで来てしまつたがここまできては、もう引つ込みがつかない。そこへ折りよく、春合宿を光社のみやげ物店でも結局おいてなかつた。「たまには酒抜きもいいではないですか。」

とあっさり諦めてくれる学生の言外には、「本当は加藤さんが持つてくるはずだったのに」とやや恨めしさが感じられる。

酒への思いをふつ切るようにして、パッキングを整えて直ちに残雪の林道を歩き始める。田畠は、深い雪の下に没していくたる処歩き放題だ。やがて両側から丘陵がせまる様になり、沢沿いの道を行くと徒渉個所に出くわした。学生の三君は、少し戻つて氷の張りついた流木から渡り始めたが、滑りそうで僕にはとても自身がない。結局少し上流から靴を脱ぎ裸足で雪の上から水の中へと強引に渡り切つた。

全員何とか徒渉を終え左岸の緩斜面を登るとカラ松の点在する広い雪原に出た。適度に締つていてこの上なく歩き易い。タクシーから遠望した西岳とP.I.尾根が、いよいよ眼前に近づいてきた。ここから見るP.I.尾根は、雪がべつとりとオーバーハング氣味に続き、その下に無数のつららを従えている。その上所々腐つて落ちかけている様でどうも気持ちが良くない。ただ灌木が見えるのでビレーピンにはこと欠かなさそうである。

やがて左手の丘陵から尾根道が始まりどんどん高度を上げていく。谷を隔てて対岸は本院岳に直接つきあげるダイレクト尾根である。

約束された様な春の強烈な日射しと雪の照り返しで顔とむき出しの腕はすでに焼け始めている。途中腐つた雪の割れ目からフィックスロープが出ていて、そこを強引に乗つ越してP.I.尾根の行く手が良く見渡せるコルにきようのテントを張ることにした。土方君と宮下君がルート工作を兼ねて偵察に行く。

四月四日、テントサイト発（六・二五）

ジャングクションピーク（一〇・三〇）P.I.の頭（一五・三〇）西岳頂上（一六・一〇）テントサイト（一八・〇〇）

想より半日程崩れるのが早そうだ。土方君の

翌朝はどんよりとした曇り空で明けた。予想よりも、新しいものを研究し積極的に取り入れようとする意欲が最近学生の間では盛んなようである。

配慮で、生まれて初めて他の人よりちよっぴり少な目の荷物になつたが、あっさりその境遇に甘んじてしまった。きょうは愈々P.I.尾根の核心部である。出発して間もなく急な雪面を登りつめると、昨日フィックスを張った地点に辿り着く。そこからザイルを更に伸ばすと程なく雪稜の末端らしきブッシュ帯にはばまれる。トップの萬濃君はかぶり気味の雪と格闘、確保の土方君を含め残り三人は、トップの落とすザラメ雪を浴びながらブッシュに体を巻きつける様にして自分の出番を持つ。ここを抜けると、暫くはすつきりした急な雪稜が続きやがて、ジャンクションの上に出る。

雪がたつぶり覆いかぶさつていて五メートル程の下降に使える支点が全くない。土方君が「キノコを作りましょう」と言い、早速シャベルを取り出し、直径一・五メートル、深さ三〇センチの溝を掘る。中々手慣れている様子で非常に頼もしい。効果は別として装備についても、新しいものを研究し積極的に取り入れようとする意欲が最近学生の間では盛んなようである。

いる。P I 尾根の頭は、もうすぐそこに見え

きれば、そこは稜線であった。

るのだが、こう次々と雪稜の切れ目がいやらしくては、思つていたより時間がかかりそうである。明日どんな天候でも下山するために何としても今日中に西岳は越えたい。入山して二日目なのにもう下山の心配をしなくてはならないとは雪山も忙しい。土方君と萬濃君は空身で雪のハングを越えザックを吊り上げる。その上部は今度こそ最後と思われる大雪壁だ。傾斜が急な為に雪がかなり落ちていて、はつきりしたステップが切りにくい。

氷まじりの草付でずるつとすべり雪に手をつっこんでしがみつく。学生の手前、僕も必死である。

こうして全員無事最後の雪壁を越えると、行く手には樺の木が見え P I の頭まで緩やかな雪面が続いている。ほつとした。ここまでザイルで九ピッチ、一度もルート工作のお手伝いをしていないことにややひけ目を感じ、

稜線直下の雪庇乗つ越しをかって出る。やや不安気な学生の目を尻目に猛然と堅い雪庇を切り崩し、ピッケルを打ち込んで腕力で登り

誰もいない薄暗い夕暮れの稜線をコンテで進む。学生諸君も緊張感から開放され、さすがに疲れがでたのか口数が少ない。十六時十分西岳ピーク（二〇五三メートル）に到着、

明日の下山を確実にする為に少しでも今日のうちに悪場を通過しておかねばならない。平坦な稜線から一転急なやせ尾根の下降となり、アップザイレンの必要をせまられる。恐らくキレットであろう。学生は三人共、『モリタカン』や『エイトカン』なるものを巧みに使い

するする降りるが、こちらは昔から肩がらみ一本だ。不利な姿勢からの空中懸垂を強いられるので、「ザイルで上から確保しましようか。」と土方君が言うが、不要と言わんばかりに意地になつて強引に降りたら首をザイルで急斜面をおり立つと人声のする社務所に漸ぎして降りていく。樹林を抜けてグリセードで急斜面をおり立つと人声のする社務所に漸く着いた。境内には夥しい程の雪がまだ残っている。それでも参道だけは、まだ割つて間もないと思われる雪分け道が真直く鳥居まで続いていて春めいた雰囲気に満ちていた。

本院岳（七・一〇）八方睨（八・四〇）

奥社（十・五〇）

明けて三日目、天気は何か持ちこたえそ

うだ。薄曇りの中、緩やかな稜線を快調に進む。本院岳の降りで一ヶ所ザイルを使つた他は、東側の雪庇を踏み抜かないようにして歩く。小さな小屋の立つ八方睨からは、五地蔵岳経由笹ヶ峰へ向う学生達とお別れである。

蟻の戸渡りと呼ばれるナイフリッジを学生に見守られながら高度をぐんぐん下げ、一ピックアップザイレンする。一人だとちょっとしチップザイレンする。た雪面の下りにもひどく神経を使うことが初めてわかった。

誰もいない雪尾根をかける様にして奥社目標に意地になつて強引に降りたら首をザイルで急斜面をおり立つと人声のする社務所に漸く着いた。境内には夥しい程の雪がまだ残っている。それでも参道だけは、まだ割つて間もないと思われる雪分け道が真直く鳥居まで続いていて春めいた雰囲気に満ちていた。

八ツ峰 I 峰 四稜

藤本敏行

時は連休も始まらんとする四月二十八日、午後九時四十七分を少し廻った処、僕は上野駅の雑踏の中をひたすら十三番ホームを目指して走っていた。何しろ四十九分発の金沢行が間もなく発車します、というアナウンスが既に構内に流れ始めているのだ。これを逃した

らもう明朝迄に富山へ着くすべはない。完全に置いてきぼりを喰うことになる。正面から押し寄せてくるホロ酔い機嫌の人々にとつて、大きなザックを背負いピックルとスキーを抱えた僕が如何に迷惑な存在であつたかは言うまでもない。一度や二度ならず罵声を浴びせかけられ、怒った顔を右に左にかわしながら、どうにか列車の最後尾に飛び乗つたのはまさに発車の寸前、列車のドアが今時珍しい手動式だったのが幸いな程だった。

大体、最近の山行はいつもこんな調子で始

まる。休暇や相棒の都合でメンバーもコースも出発直前迄決らず、おまけに夜行に乗り込む程の慌しさときたら、昔の海行遠征ではなにかれどうまく東京を出てしまえば五〇パーセントは成功したようなもの、と言いたくなる程。

何れにしても今年の五月の計画もそうした混沌の中から生れ、どうにかスタートした訳に、第I峰四稜経由八ツ峰を登り、剣から大きなザックを背負いピックルとスキーを抱えた僕が如何に迷惑な存在であつたかは言うまでもない。一度や二度ならず罵声を浴びせ下ろうというものである。同行者は加藤、兵藤の相変らず陥没中の両君。陥没中とは何のことか、急の為書き添えておくと、我々四十一年入学組は後輩の皆さんに着々とゴーリンしているというのに結婚、婚約はあるかその目処さえ未だにつかぬ状況にある為、

口の悪い連中から大地溝帶と言われている次第。その三人が例によつて有楽町界隈で酒を酌み交す内に出てきたのがこの計画だつた。

加藤は雪の八ツ峰からの剣なら非常に燃える処ありといふし、八ツ峰も四稜なら人も少

ないだろう。同時期に学生達がI峰第三稜経由の八ツ峰を計画していることにも触発された。都會ではよく会うが山へはあまり同行したことのない彼らと一緒に登るのにも興味がある。そして何より剣沢とコット谷の下りにはスキーが使える。これには三シーズンに亘る長岡生活でその腕を上げた兵藤が大賛成だ。

僕にとつてもスキーを持つての剣行は長い間の懸案であった。過去三度の五月の剣行、しかしその何れもがスキー無し。室堂から望んだ全山これ巨大なゲレンデといった感じの立山、大日の広大な斜面、仙人山から眺めた白い静寂に包まれた剣沢が鮮かに蘇えてくる。そして快適に滑走するスキーヤーに頭に来ながら弥陀ヶ原を黙々と歩いた記憶が、今度春に剣へ行くなら断然スキーを持って、と

× × ×

列車の最後尾から苦労して一両目迄辿り着くと、ボックス席には加藤、兵藤の他に学生の土方君が居り

「もうこないかと思つてましたよ」

とか言つて迎えてくれた。土方君はこの夏に計画しているインド行の準備の為、一人遅れて八ヶ峰へ向う処、先発の三名は既に室堂迄入っているという。引地君差し入れのウイスキーを飲みながら三時頃迄話し込んでしまつた。

四月二十九日 快晴

冬の異常降雪の影響で弥陀ヶ原ホテル迄しかバスが入らず、大分軽量化したつもりだったが結構重いザックにぶつぶつ言いながら歩き始める。三〇分程両側が七一八メートルの雪壁となつた除雪路を辿り、雪上に出た。兵藤と土方はスキーに紐を付けひきずりながら、加藤と僕はシールを着けて歩き出す。快晴無風、入山日にしては良すぎる天気だ。後が怖い。遠くに除雪作業のブルの音をききながら、スキーヤーの群れに混つて歩いていると眠く

なつてくる。あまり山の氣分が湧いてこない。は早速食料のチェックを始める。出てくる、強烈な照り返しの中大汗をかいて、別山乗越の背後に黒い剣を眺めながら歩く。この辺から見る剣は鋭さこそ群を抜いているものの余り高くない。大日と立山のウォリュームの方が圧倒的な迫力を持つている。

室堂を過ぎた処でシールをはずした。雷鳥沢迄ほんのひと時の滑降、スキーを履いたからかそれとも元々かは知らないが、兵藤なんぞは可愛いいらしくも、

「ネエ、見て、見て」

とか言いながらクルクル回りながら降りている。腐った雪と重い荷物に快適とは言えぬまでも、まずはスキーを持ってきた甲斐があつたという訳だ。

別山乗越への単調な登り、途中から風が出て来た。四時二十分乗越着、登り始めの頃には御前の小屋でビールを飲もうなどと言つていたのに、強い風で体がすっかり冷えてしまい熱いお汁粉を食べる。土方は春山の残りのデポを回収した。

雷鳥沢にはテントが六一七張り、時刻は既に午後二時、例によつて「泊つちまおうか」しかし荷が重い、雪が悪い、一日の好天に腐り切つた雪だがその腐り方が一様でない。そして何より技術がいまひとつである。かの兵藤でさえ時たま回転するだけで大半は斜滑降と横滑りで処理している始末。およそ快適な滑降とは言い難かつたがそれでも最初の内は滑降とは言つて真砂沢出合迄は入つておいた方が良いに決つてゐる。しかし余りにも荷物が重すぎる。加藤が食料を用意するといつも荷物が重くなる。重いのが何より嫌いな兵藤と僕が重くなる。重いのが何より嫌いな兵藤と僕

なつてくる。あまり山の氣分が湧いてこない。は早速食料のチェックを始める。出てくる、強烈な照り返しの中大汗をかいて、別山乗越の背後に黒い剣を眺めながら歩く。この辺から見る剣は鋭さこそ群を抜いているものの余り高くない。大日と立山のウォリュームの方が圧倒的な迫力を持つている。

別山乗越への単調な登り、途中から風が出て来た。四時二十分乗越着、登り始めの頃には御前の小屋でビールを飲もうなどと言つていたのに、強い風で体がすっかり冷えてしまい熱いお汁粉を食べる。土方は春山の残りのデポを回収した。

雷鳥沢にはテントが六一七張り、時刻は既に午後二時、例によつて「泊つちまおうか」しかし荷が重い、雪が悪い、一日の好天に腐り切つた雪だがその腐り方が一様でない。そして何より技術がいまひとつである。かの兵藤でさえ時たま回転するだけで大半は斜滑降と横滑りで処理している始末。およそ快適な滑降とは言い難かつたがそれでも最初の内は滑降とは言つて真砂沢出合迄は入つておいた方が良いに決つてゐる。しかし余りにも荷物が重すぎる。加藤が食料を用意するといつも荷物が重くなる。重いのが何より嫌いな兵藤と僕が重くなる。重いのが何より嫌いな兵藤と僕

繰り返す。そろそろ足が痛くなってきた。長次郎の出合付近では既に夕刻というのに右岸から小雪崩が出た。小さな湿潤表層雪崩だが用心して谷筋に移ると今度はデブリまたデブリ、遠目には最高の滑降コースに見えた剣沢の何と滑りにくいくことよ。

漸くにして六時十分、真砂沢出合着。先発の学生達は沢の真只中の雪洞に居た。真中といつても余程の大雪崩が出ぬ限りは安全な場所だが我々は右岸の台地上にテントを張つた。

剣沢をはさんで I 峰より落ちる三の沢が正面に見える。その右手には三稜が左手には二稜が I 峰めがけ突き上げている。四稜は三稜の陰になつて見えぬ。暗くなつてからも I 峰

剣沢をはさんで I 峰より落ちる三の沢が正面に見える。その右手には三稜が左手には二稜が I 峰めがけ突き上げている。四稜は三稜の陰になつて見えぬ。暗くなつてからも I 峰側で雪崩の落ちる音が聞こえる。

四月三十日 雨のち曇

昨夜の予想通り夜半から雨が降り出し、明るくなる頃には何もかもビショ濡れ、水溜りの中に寝ているようなものである。雨漏りに顔面を襲われると眠れないでテントの中で傘を広げ、どうにか顔だけは確保する。動く

と冷たいので朝飯はやめにし、ひたすら時が過ぎるのを待つ。こういう時は、「この雨は相当強いから低気圧は大分発達しているに違いない。発達中の低気圧のスピードは速いものだ、従つてこの雨はそう長くは続くまい」てな具合に楽観的に考へるにこしたことはない。眠るのにも飽き、冷たく不快な我身を嘆くのにも飽きた頃、兵藤が歌を唄おうと言いました。日頃は音楽などとは全く無縁な生活を送つてゐるくせに、山へ來ると不思議とよく歌いたがる処がある。六〇年代から七〇年代前半の流行歌を知つてゐる限り歌いまくつてゐる内に雨は小降りになつた。

午後、学生達がパインナップルを持つて遊びにきた。

と冷たいので朝飯はやめにし、ひたすら時の過ぎるのを待つ。こういう時は、「この雨は相当強いから低気圧は大分発達しているに違いない。発達中の低気圧のスピードは速いものだ、従ってこの雨はそう長くは続くまい」てな具合に楽観的に考へるにこしたことはない。眠るのにも飽き、冷たく不快な我身を嘆くのにも飽きた頃、兵藤が歌を唄おうと言いました。日頃は音楽などとは全く無縁な生活を送っているくせに、山へ来ると不思議とよく歌いたがる処がある。六〇年代から七〇年代前半の流行歌を知っている限り歌いまくっている内に雨は小降りになつた。

と冷たいので朝飯はやめにし、ひたすら時の過ぎるのを待つ。こういう時は、「この雨は相当強いから低気圧は大分発達しているに違いない。発達中の低気圧のスピードは速いものだ、従ってこの雨はそう長くは続くまい」てな具合に楽観的に考へるにこしたことはない。眠るのにも飽き、冷たく不快な我身を嘆くのにも飽きた頃、兵藤が歌を唄おうと言いました。日頃は音楽などとは全く無縁な生活を送っているくせに、山へ来ると不思議とよく歌いたがる処がある。六〇年代から七〇年代前半の流行歌を知っている限り歌いまくっている内に雨は小降りになつた。

午後、学生達がパイナップルを持って遊びにきた。

のルンゼに入れば容易にPⅠとPⅡのコルに出られそうだ。先行パーティらしい人影が二つ、ルンゼの入口付近に見える。

スキーをザックにくくりつけ五時三十分出发、デブリの上を歩きやがてルンゼ内に入る。单调だが次第に傾斜はきつくなり大分高度を稼ぐ。たっぷり二ピッチでコル着。

まずは申し分のない天氣で気温がどんどん上昇しているのが判る。コルからPⅡへの登りはのっぺりした急な雪の斜面で、その真中に先行者のトレースが一本直上している。その上部百メートル程で尾根状となるらしく、先行パーティがスタッカットで動いているのが見える。雪の斜面の右サイドは急傾斜で三の窓谷へ、左端は小岩壁となり登ってきたルンゼに落ち込んでいる。まだ朝八時を少し過ぎたばかりというのにもう雪が融け始めた。

左寄りにまばらにはえた灌木伝いにザイルを伸ばす。腿までのラッセルでなかなかのアルバイトだ。その後も雪崩は頻繁に落ちたが、大半が一発目と同じコースを落下していったのは幸いだった。

ザイル三ピッチで左側の岩壁上に出た。稜

上に出たことになる訳だが、左側はスッパリ切れており雪庇も張り出しているのでさらに三の窓谷側を巻きぎみに登る。五ピッチ目のルートを伸した兵藤からのコールで、ミッテルの僕は登り始める。かなりの傾斜である。

兵藤の所まで辿りつくと、そこは漸く完全な稜上だった。

三稜が手に取る様に良く見える。大分沢山のパーティが取り付いておりそれが学生達か判然としないが、コールをかけると何か叫び返してきた。どうも我々が今居る所は、大きな雪庇の上だから注意しろと叫んでいる様だ。僕の番が来た。灌木をつかんで懸命に頑張稜上正面は高さ五メートル程の岩場となつており、我々との間には今にも大きく崩れ落ちそうな感じで黒い割れ目が口を開けている。

大体その岩場にしたってたとえ取り付いたに

してもこんな荷物では登れそうもないし、岩の上には不安定な雪の塊が乗っている様な状態だ。幸い三の窓谷側にまたからむことが出来そうなのでひとまず二メートル程右側へ降り、狭いが安定したテラスでラストの加藤を迎える。

行く手には三メートル程のほぼ垂直な岩場が立ちはだかっているが、細いけれど灌木が生えているし何とか乗つ越せそうだ。その上部には再び白い雪面が見える。加藤が色々迷ったあげく、アイゼンをはずして空身で取り付く。灌木をつかんで強引に腕力で乗つ越す。

不安定なスタンスに立つてザックを引上げる。大変、手強い尾根であるようだ。

二十キロ位はある上にスキーなどというやつかいなものが付いているので大変な苦労をしてどうにか再び背負い、さらに彼はザイルを伸ばす。

僕の番が来た。灌木をつかんで懸命に頑張るが腕力尽きて情無くも一担ギブアップ。腕の力が戻る迄の間に兵藤がトライする。ギャアギャア言いながらも何とか乗つ越してしまつた。さあ今度こそ登り切らねばまた置いて

きぱりを喰うような事にもなりかねない。灌木登りはやめにし、少し下の完全なフェークを残置ハーケンとシューリングを頼りにどうにか登り切る。やれやれという訳だ。そのままさらには一ピッチ、ナイフリッジ上を進み大休止を取る。

コルを出発してから七ピッチ、四時間、まだ幾らも来ていない。行く手には延々と不安定な雪稜が続いており、I峰は遥かに高い。次のピッチも加藤トップで進む。細い雪稜で傾斜はそれ程でもないが、両側が見事に切大変、手強い尾根であるようだ。

雪面のコンタクトラインを進むことになるので、腐った雪にパッククリップをあけたキ裂の処理に苦労して進む。さらに一ピッチ伸して、漸くマッチ箱状ピーカー手前のコルと思われる地点に到着した。三稜上で順番待ちをしながら日光浴をしている学生達とトランシーバで交信、我々の上部が果してそのマッチ箱ピークか否かを確認してもらう。

こともないです」

と萬濃君が返事をしてくる。

どうやらこのマッチ箱のピークをもつて、四稜の核心部は終りを告げそうな感じであつた。さらに上部にもいくつかの岩峰やナイフリッジが見えたけれど、太陽が陰つて雪さえ落ち着いてくれれば、四の沢上部や三の窓谷側の斜面を巻き気味に登れそうだったからである。しかしこのマッチ箱であるが、それは

とても稜上を素直に辿る氣を起させるような代物ではなかつた。細い岩稜上に分厚い生クリームの様な雪が乗つかり、しかもその生クリームは今にも崩れ落ちそうに四の沢側に露出した三〇メートル程の岩壁の上にたれ下がり、その先端からはポタポタ水が滴り落ちている様な状態なのである。幸い四の沢へは急だが雪壁を下降して降り立つことができる。先行者もここは四の沢へ一担降りている様だ。いやなのは岩壁の下、即ち水滴の落ちている雪庇の下をトラヴァースせねばならぬことだが、たいして議論もせずにここは巻くことにしようと決まった。

加藤トップで四〇メートル一杯ザイルを伸ばす。丁度、雪庇の真下に居る様に見えたので、大丈夫かと声をかけるが、大丈夫、崩壊してもここには落ちてこないとの返事。兵藤がスライドで続き、加藤の処迄達し、カラビナをザイルからはずすのを見届けて僕はビレイを解く。雪に打込んだピックルを抜き、置いてあるザックを取りに後を向きかけた瞬間だつた。

一方で、張り切つたザイルで身動きの取れぬ雪庇の一部が崩れるのが見えた。岩壁に当たり、砕けて二人の上に落ちかかる。ほんの一瞬の出来事、崩壊した時の音が僕を振り返らせたのか、或いは僕が見ている前で起つたことなのか、それとも加藤達が何かを叫んだのか、本当の処はつきりしたことは判らない。とにかく僕は反射的にピックルを打込み、足を埋めている雪を早く取り除かないと、また雪庇が崩壊するのではないかと思つたからだそうだ。

一方で、張り切つたザイルで身動きの取れぬ雪庇から脱出せねばと、ポケットからシユーリングを出す。何度目かのコールでまず加藤から、「ダイジヨーブデース」と、続いて兵藤からも、「フジモトサーン、オリテキテヨー」と応答があつた。

僕が確保を解いてからせいぜい一分位の間の出来事だったと思うが、随分長い間だつた様な感じがする。結局、加藤は咄嗟にピックルを打込みこらえようとしたものの流され、下半身を埋められ身動き出来ぬ状態になつて兵藤はすぐ傍の割れ目状のところに飛ばされた。兵藤がオリテキテヨーと叫んだのは、いた。兵藤がオリテキテヨーと叫んだのは、た雪庇が崩壊するのではないかと思つたからだそうだ。

二人ともコルへ登り返す。幸い怪我はして強いたんだ。兵藤は？ 大声でコールするが答がない。大変だ、とうとうやつてしまつたかな、という思いが頭の中で駆け巡る。そしてで済んだ。安くついて良かった。当人達も自

分達の持物の中で唯一の高級ブランド商品を失くしたというのに、軽いショックのせいか、「イヤー、ボウシダケデスンデヨカッタ」とか言つて漸く笑みが戻る。

しかしこれで今日は二度失敗を犯したことになる。一度目は P I P II 間のコルで、「雪

崩れそうだな」と口にまで出しながらアンザイレンせずに出発しようとして雪崩が出た時のことだ。雪崩にしても雪庇の崩壊にしても、少しタイミングがずれていれば、何てことなく通過していたかも知れない。だが、それは同時に、一步間違えば大変なことになつていたということでもあるのだ。

時刻は午後四時、もうじき太陽は I 峰の陰に入り雪も落ち着き始めるだろうし、天候も安定しているので、暗くなるのを待つて登る手もあつたが、ここは無理せずコルに泊ることにする。明朝、明るくなる前に出発する方が賢明だ。先日の雨でまだ乾き切っていないシュラフを乾かし、雪稜を削りテントを張つた。

五月二日 晴れ後曇り

リヒットをつけ出発する。岩壁の下までの一ピッチは安全を期しザイルを出し、後は四

の沢をまっすぐに登る。雪はよくしまり、快適に高度を稼ぐ。再び稜線に戻り、最後の岩峰は大きく三の窓側にからみまた雪稜に戻る。峰は大きく三の窓側にからみまた雪稜に戻る。と言われて、どうやら真砂で隣にツェルトをやがて三稜とのジャンクションを過ぎると、

I 峰の頂上はもうすぐそこだった。

I 峰の下りで学生達に追い着く。彼らは昨夜は I 峰頂上で過したという。

七名の大パーティとなり、適宜ザイルをフ

ィックスしたりアブザイレンを繰り返しながら進む。V 峰の下りでアブザイレンに大分モタモタしたが概ね順調に登り続ける。今日一日は晴天が続くのではと思っていたが、この頃から雲が広がり、完全な高曇りとなつた。

今日は最低剣沢迄は行きたいがこの調子だと悪天と競争になるかも知れぬ、と考えながら歩く。VII 峰にさしかかる頃には霰の様な雪が降り出した。八ヶ峰の到着二時二十分。池の谷乗越へと下り、ここに雪洞で一泊してチンネを目指す学生達と別れ頂上へ向う。空はどんよりと厚く雲がたれこめ風は強いが、幸い霰もやみ遠望もきく。

頂上直前の処で雪洞を掘っているパーティから突然、

「一橋の方ですか」

と声をかけられた。どう考へても記憶にない初対面の人達である。どうして僕らのことを

知つているのかなと思つたが、続けて

「スキーは途中で捨てずに済んだのですね」

と言われて、どうやら真砂で隣にツェルトを張つていた人達だと察しがついた。さらに

「雨の日の歌、なかなか良かつたですよ」といわれ、降参する。

頂上着、午後三時三〇分。

この日は剣沢迄歩き、暗くなるころ小屋に入つた。その夜、ビールを飲みながら、四稜の登攀に充分満足し、自分達のスキーの腕が今年の剣の雪にはあまりマッチしていないことを反省した僕らは、

「コット谷なんてこの天気じゃ面白くないに決つて、早く富山へ降りて酒を飲もうぜ」

と決めた。翌日は雨。小降りになるのを見計らつて出発、再び別山乗越を越え、雷鳥沢を滑り、立つてただけで行程の持る霧の弥陀ヶ原の滑走を存分に楽しみ、富山へ下つた。

そうそうこぼれ話をもうひとつ、雷鳥沢でデポを回収した僕らは、余った食料を可愛い女の子のパーティにあげることにした。渡す役は兵藤がかつて出た。女の子に近付きひと言ふた言、すると彼女は、

「あのー、私達来たばかりで、お分けする食料何もないんですけど」

インドヒマラヤ登山計画

ホワイト・セール(6446m)を目指して

一橋大学一橋山岳部

現役の四年生三名が今夏、インドヒマラヤのホワイト・セール登頂を目指に着々と準備を重ねております。現役だけの海外遠征は、山岳部として初めてだけに、彼らの活動と成果が期待されます。ここに、隊長の中村君（法四年）より計画の概要を述べてもらい、会員諸氏の御協力と御支援を仰げればと考えます。

（編集子）

一、ヒマラヤへ行こう

昨年来、現役の学生の間で海外（特にヒマラヤ）の山へ行きたいという願望がありそれが遂に具体化するに至りましたので、ここにお知らせしたいと思います。

ヒマラヤは、本格的な山登りを行なっている者なら誰でも一度は夢見る対象だと思います。初めはただ漠然とした憧れにしか過ぎなかつたヒマラヤ行きが、山岳部の活動が地道にではありますか着実に成果を挙げ上り調子になつてくると、その憧れがどんどん強くなつてきて、今がチャンスだ、学生時代にこそやつておくべきだ、という声が急速に高まつて参りました。

今回の隊員はすべて学生で、経験・実力の面から不安もあるかと思いますが、逆に学生だけだからこそすべて自分たちで、手続き、計画立案から登頂ルートの決定・ルート工作などです。

二、計画の概要

目標はインド北部、ヒマチャル・プラデイシュ州のホワイト・セール（六四四六メートル）です。参加メンバーは中村宜幸（四年）土方浩（四年）萬濃英士（四年）の三名。期間ではありますか八月一日に成田発、九月二十五日にはデリーに戻る予定です。

三、ホワイト・セールについて

今回インドヒマラヤを選んだ理由は(i)手続きが簡単なこと(ii)費用が安いこと(iii)モンスーンの影響を受けないこと、の三

ど未知の難物を一つ一つ片づけて行く喜びをすべて自分のものにできると考えます。

昨今ヒマラヤの大衆化ということが言われていますが、現役の学生だけの登山隊というのはほとんど耳にしません。ここに今回の我々の計画の一つの意義があると思いますし、また大きなやりがいを感じています。経験不足は情報量と何よりも若さでカバーし、この三年間で身につけたものをヒマラヤの山へ思いきりぶつけてこようと決意しています。ここに計画の内容をお知らせし、OB諸兄の御理解と御協力をあおぐ次第であります。

インドの山はインド登山財団(I.M.F.)の許可を得て登るのですが、日山協の推薦状が不要の点でネパール・パキスタンより有利です。その反面手続き規定がしつかり確立されていないため、初めての人間には判りにくくて、許可取得まで多くの方にお骨折りを戴きました。

ホワイト・セールはラホールとクルの分水嶺

にあり、バラ・シグリ氷河というインド第二の氷河の外周を形づくる山々の一つです。登山基地はマナリで、デリーより北北西へ車で一日の所です。このあたりは、倉知OBが「ロシュ・ゴル」の帰りに寄られたり、五十年には前神・藤本両OBがハヌマン・ティバに登られたりして本会とは縁のある所です。道路が発達しているので今回も四千メートル近くまで自動車で入れ、高度障害の問題はあるもののキャラバンが短かいのが何よりも利点です。

次にバラ・シグリ氷河ですが、この回りにはホワイト・セールを初め六千メートル級の山が林立し、いわゆるライト・エクスペディションの格好の舞台となっています。氷河は末端が約四千メートルで、そこから急激に高度をあげ五千メートル位で広大なプラトーとなっています。下部はすべてモレーンに覆われ、稜へ取りつき、登頂の予定です。

が伸びています。

最後に気候ですが、このあたり一帯はヒマラヤ西部攪乱域に属し夏は降水量が少なく冬に多量の雪が降ります。それゆえマナリからローラン・パスという峠を越えると木は一本もなくなり、荒れた乾燥地帯となります。です

四、登山活動計画

百九十五万円で、一人当たり六十五万円負担

する予定です。

百九十五万円で、一人当たり六十五万円負担

する予定です。

以上簡単ではありますが、計画を記させ

ていたら、情熱だけは他の誰にも負けないものと自負していますが、なにぶん学生だけの隊伍で、いろいろな面で力足らずな所は否めません。我々三人一丸となつて精一杯の努力をすることはもちろんですが、やは

るOBの皆様の御理解・御協力無しには成功は難しいかと思います。どうぞお力添えのほどよろしくお願ひ致します。(文責 中村)

なお、バラ・シグリ氷河側からは、一九七九年に豊田山岳会が南東稜より登頂しています

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに車でローラン・バスを越えバタルという所まで行きます。そこからキャラバンを始め、2日でベニスキャンプ予定地へ着きます。バラ・シグリ氷河舌端の少し下です。

そこからバラ・シグリ氷河を経てホワイト・セール氷河へ入り、上部プラトーを横切つて北

が、北稜は未踏と思われます。北稜は隣のパ

スラヘとつながっており、最低コルからア

イスフォールが前記プラトーへと落ちていま

す。最低コルは標高約五千八百メートルで、

そこから頂上までの平均斜度は約三十度途中一ヶ所ギャップがあり、そのまま岩場と東壁となつて切れ落ち、左右に北稜と南東稜が伸びています。

から我々の計画している八月は好天が期待できまた雪崩の危険も少ないと思われます。です

五、予算

年には前記アイスフォールと上部の岩場で、かなり手強そうですが当たつて砕けろの覚悟で当るつもりです。

デリーからマナリへ入り、さらに

